東京支部

当支部は、昭和四十一年六月一日午後六時より八時半まで東京新橋の平和相互銀行本店八階ホールで結成式が行われた。当日は相当激しい風雨であったが、百五十名（京三中卒百十名、山城高卒四十名）の予想外の多数が出席し、世話人一同が感激した。中でも当日の司会者であり初代の幹事長にご就任頂いた有田義男氏（京三中第十八回、昭和二年卒業）は、当時、東京で弁護士業を開業したばかりで同窓会名簿を頼りに挨拶状を送っておられた中村勝美氏（京三中第三十七回、昭和二十年中退）の補佐を得て、東京支部発足を志され、当時ご退任後在京されていた恩師大井潔先生（数学）のお宅や川島甚兵衛氏（京三中第十九回、昭和三年卒業）のお宅に発起人を集められ、自らも単身で、何度も東京―京都間を往復され、ガリ版刷りの同窓会名簿（東京版）を作成されていたが、まさに支部生みの親としてこの結成式にはひとしおのご感慨であったと察せられる。前記の大井潔先生や清水初太郎先生（博物）にもご支援頂いた。当結成式には京都の本部から会長岸田幸雄氏（京三中第一回、

明治四十三年卒業）副会長山村善助氏（岸田氏と同期）山城高第五代校長山崎秀雄先生のご列席も頂いた。発起人総代として山本健三郎氏（京三中第二回、明治四十四年卒業）が挨拶、初代の支部長に就任された。

二代目の支部長森田乕男氏（京三中第十回、大正八年卒業）は同和鉱業役員にご就任であったことから国際観光ホテル（東京駅八重洲口）が同総会場として利用されていた。ちなみに第二代幹事長の丸茂（旧姓渡辺）栄三氏（京三中第二十二回、昭和七年卒業）は京三中ラグビーのエースで、早大在学中も全日本ラグビー代表として名声を馳せられていた。

その後は、かねて有田義男氏等が属目されていた秀才同期の三人トリオ所秀雄、武居文吉、椹木暎宣の三氏（京三中第二十七回、昭和十一年卒業）に託された。支部長に就任された所氏は京三中始まって以来の秀才と謳われ、農林省の筆頭課長から養鶏業等の会社を興され、このため支部の事務所も初めて独立してその会社の一隅に置かれた。総会案内の宛て名書きや発送事務、総会会場での案内など会社の女子職員を支援させて頂いた。武居氏は副支部長として、竜安寺の檀家筆頭でもあった椹木氏も蔭に廻って両氏をささえられていた。当時、「会員の心の交流の場」として支部報「双陵」を発刊され、年に一回で約十年続けられた。

第四代支部長としてお迎えした藤林益三氏（京三中第十六回、大正十四年卒業）には七十歳から九十二歳までご就任をお願いした。

何と言っても国家三権の長の一人最高裁判所長官であった人である。ご多忙の身でありながら、よくぞ受けて頂いたものである。総会にわざわざ京都の本部からご出席頂いた川島春雄会長（京三中第二十一回、昭和五年卒業）もお喜びながら「恐れ入った」と恐縮されていた。まさに藤林先生の京三中への愛校心であったのであろう。園部町のご出身で当時は汽車で通学できず、五年間寄宿舎に入寮されていた。総会出席者の減少に心を痛めていた事務当局者としてはまさに天にも昇る心地のご就任であった。リベラルで茫洋たるご温容、中学二年から今日まで日記を書き続けられているご誠実さに魅かれて九十二歳まで先生を放さなかった。先生も山城高出身の優美な女性の後輩に囲まれて「若返った」と喜んでも頂いた。このご老体の支部長に副支部長として二十年近く仕えて頂いたのは阿座上新吾氏（京三中第三十一回、昭和十五年卒業）であった。同氏は同期の長谷川敬三氏が三段跳びで日本一と称されたごとく、長距離水泳では中学時代はもとより旧制高校時代もその覇権を狙うスイーマーとしてその名声を轟かせておられた。建設省に入り本省の砂防部長としてその面のリーダーでもあった。総会では元

ビルマ独立軍の志士、髭面の奥田重元氏等同期の人々がその傍らに集まっておられた。

そもそも同期会とかクラス会等同一時期の横の体験を共にしている者の懇親会は集まりやすいが、上は八十歳から下は三十歳までの縦の懇親会を集めることは至難である。

共通なのは、はるばる東京という異郷の地に住む寂寥感に、同じ京都洛西の学び舎で共に青春を謳歌した思い出が心の癒しともなればとの支部役員一同の願いである。福引きを採用したり、有能な劇団スターも含む美しく清楚な女性会員、最近では飯田（旧姓大槻）佳子さん（山城高第九回、昭和三十二年卒業）、中沢（旧姓木村）薫さん（山城高第二十一回、昭和四十四年卒業）等々に司会や会の引き立て役をお願いしているのもその苦心策である。魅力の柱の一つに会場が日比谷の帝国ホテルで九千円の格安でサービスしてくれていることがある。これは日本では指折りのホテルマンと評されていた河合佐一郎氏（京三中昭和十九年～二十三年在学）が帝国ホテルのマスター当時の愛校心のはなむけであった。河合氏のその後の一流ホテル群への華麗な転身後もその志は受け継がれている。

年会費は千円であるが総会出席者は約六十名を加えて五百名が会費を送って頂いている。会員は約千五百名である。この難しい支部の運営・総会行事を殆ど一手で一円の酬いもなく自ら

持ち出してでも「幹事長」という番頭役を三十年続けて頂いている功労者は宮崎一雄氏（山城高第四回、昭和二十七年卒業）である。同氏を支える副幹事長職には川人隆一氏（山城高第八回、昭和三十一年卒業）が就いておられる。幹事長を支える男女十九名（一部の交替や増減もあるが）の世話役が、毎年、総会の二ヶ月前には前記の蔭の功労者中村勝美氏が銀座に開かれている弁護士事務所に無料で提供して頂いている支部事務所に集まり、総会案内の宛て名書きと発送を手伝っておられ、総会では会場を取り仕切って頂いている。そのご常連も還暦を超え古希に近い人もおられる。恐らく百周年記念の平成十八年も溌剌として四十二回目の東京支部総会が盛大に開かれることであろう。

（東京支部長竹岡記）